

読者のみなさんはシンガポールと聞いてどのようなイメージをお持ちだろうか？ 世界の金融センターとしてのシンガポール、あるいは英語が公用語として定着し、成長著しいアジア諸国を束ねるハブとなりつつある都市国家、いろいろあるだろう。



私自身、ここ数年シンガポールについて特別な興味を抱いていた。興味を抱いたきっかけは2つある。1つは小社が海外向けの代理人を務める作家、田口ランディ氏が、2年前にシンガポールの政府機関である国立芸術評議会（National Arts Council）の招待を受けてシンガポール文学祭（Singapore Writers Festival）に参加したこと。もう1つは、ここ数年、日本の学術書やビジネス書をシンガポールの出版社から英文出版してもらう機会に恵まれたためである。

これまで、文芸作品を中心に欧米の出版社から出版してもらう機会もあったが、同時にハードルの高さも感じていた。しかし、ここ数年シンガポールと取引をする中で、「もしかしたら今後は、欧米よりも経済成長著しいシンガポールでまずは英文出版し、世界市場に展開することもできるのでは？」という思いが自分の胸の中で膨らみつつあった。そして「シンガポールは親日的」と常々聞いていたので、その実態を自らの目で確かめるべく、11月1日から10日間にわたって開催された文学祭に合わせて渡星し、取材した。

●シンガポール文学祭（Singapore Writers Festival）2013

ご存知のとおりシンガポールは都市国家で、中華系、マレー系、インド系と様々な民族からなる人口約530万人が東京都23区ほどの面積にひしめき合って暮らしており、さらに、著しいアジアの経済成長を取り込もうとする日本や欧米諸国から外国人も押し寄せている。

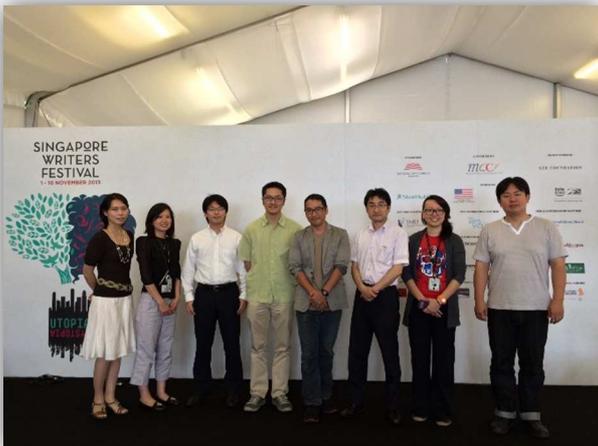
シンガポールはこれまで東南アジアの自由貿易・中継基地として発展してきたが、近年、シンガポール政府が文化政策を重視するようになり、国際社会を代表する文化都市となるべく膨大な予算を芸術分野に投入している。このような動きの背景には、自由貿易都市としてアジアの中核となり得たシンガポールが、今後は芸術や文化の面でもアジアのハブ都市の座を獲得しようという思惑が垣間見える。

そのような政府の意欲的な文化政策の中でシンガポール文学祭は誕生した。今年で 16 回目のこの文学祭は、シンガポールの作家を世界に向けて発信する目的で開かれる年 1 回の文学祭であり、情報文化省（Ministry of Information and The Arts）から独立した独立行政法人である国立芸術評議会（National Arts Council）によって運営されている。

毎年規模が拡大しており、今年は海外から招いた 70 名の作家と、シンガポールを拠点に活動する作家 120 名が一堂に会し、延べ約 2 万人の一般参加があった。文学祭の期間中、作家向けにはどのようにクリエイティブな作品を生み出して商業的に成功するかを模索するワークショップ、一般向けには作家の講演など、多種多様なプログラムが組まれていた。

文学祭のディレクター、ポール・タン氏によると、シンガポールにおける日本の作家の知名度は高く、村上春樹氏をはじめ、これまで何度も有名作家の招待を試みたが、様々な障壁があったり、窓口がはっきりせず、2 年前に田口ランディ氏を招聘した以来、日本人作家の参加が途絶えているとのこと。渡航や滞在費用は文学祭側が工面する予定で、

もし招聘に応じてくれれば 500 人規模でのシンポジウム開催も可能なので、今後、是非日本の作家の参加を期待したいとのことだった。



（文学祭ボードメンバーとともに）

●英語による発信力

小社はこれまで、World Scientific Publishing というシンガポールに本社を置く学術系出版社から、日本の大学教授の英文出版に際して多大なる協力を得てきた。そして、今回初めて現地のエディターと直接会って話をする機会を得た。

同社はシンガポール以外に、北米やイギリス、中国やイスラエルにも拠点をもち、抱えている著者の 4 割はアメリカ人だという。その他は中国や韓国などアジアの著者が多いが、日本の著者に関しては今のところ小社経由のみである。

日本では意外と知られていないが、シンガポールの出版社は世界に流通網やネットワークを持っているところが多く、紙の本以外にも電子書籍やモバイル専用の配信も進んでいる上、コンテンツは英語でリリースするので日本国内で出版するのに比べて発信力は格段に優れている。

今回、シンガポールを代表する知識人であるトミー・コー氏が World Scientific Publishing から著書を出版し、シンガポール紀伊國屋書店本店で記念イベントが行われ、筆者も招待を受けた。コー氏は 30 歳にして時の首相リー・クアンユーから国連大使に任命されたというエピソードの持ち主で、その後は駐米大使や国連海洋法条約の議長なども務めた超エリート外交官だ。紀伊國屋書店でのサイン会は大変な盛り上がりを見せ、書店内には列に並ぶ老若男女の列が延々と続き、US\$85(約 8,500 円)もする高価なハードカバー本が瞬く間に売れていった。



(トミー・コー氏出版記念イベント)

文学祭の期間中、シンガポール在住の日系人作家、Rei Kimura 氏ともお会いした。氏はシンガポールに生活の拠点をもち、普段は投資銀行で働きながら、日本の歴史に絡めた小説から動物とのふれあいの物語まで、実に多様な作品を発表している。日本国籍だが、父が医者で世界中を転々としなければならなかったため、幼い頃から各国のインターナショナルスクールで育ち、英語がネイティブで中国語も堪能という稀有な作家だ。

氏には英語で書けるという日本の作家にはなかなか真似のできないアドバンテージがあるのは確かだが、自らの作品を世界に広げるべく、アジアを中心に普段からネットワーキングをしており、フランクフルトブックフェアにも参加している。また、世界各地に自分のエージェントを配置しており、著作はこれまでにスペイン語、ポーランド語、ロシア語、オランダ語、タイ語、ヒンディー語、インドネシア語、はてはマラーティー語まで、実に様々な言語に翻訳されている。出版社や他人任せにせず、自ら世界展開をしているその姿勢には見習うべきものがあると感じた。

●シンガポールにおける日本コンテンツの受け入れ状況

現地でお会いしたシンガポールの出版関係者やエージェントから、BooksActually という書店を覗いてみるよう勧められた。同書店は街の中心よりやや西にはずれた郊外にあった。店舗自体は小さいけれども文芸書やアート本を中心に、常識にとらわれない遊び心満載のディスプレイを展開するこの書店に、私は一瞬にして魅了された。

Math Paper Press という文芸やアート系作品を主とするスモールプレスも経営するオーナーのケニー・レック氏によると、ここ数年、アメリカの大手書店チェーン、ボーダーズやページワンという人気書店が撤退する中で、お客さんにリピーターになってもらうことに専心し続けた結果、上記を中心とした品揃えとなり、何時間お店に居ても飽きがこないヒップでスタイリッシュな空間が出来上がったそうだ。

店内には、2012年にマンアジア文学賞（Man Asian Literary Prize）にノミネートされた川上弘美の『センセイの鞆』の英訳版『The Brief Case』や村上春樹氏の『1Q84』をはじめ、夏目漱石や安倍公房にいたるまで、数多くの日本の作品の英訳版も並ぶ。

レック氏は、「シンガポールにはまだまだ書店が必要だし、客のニーズに応えられる意欲的な出版社が必要。だから自分が始めた。その中でも日本の作品は外せない」と話す。だから英訳版を取り寄せているが、吉本ばなな、小川洋子、桐野夏生などの作品はとりあえず日本語のまま取り寄せ、棚に置いているほどだという。氏はシンガポール文学祭の運営にも関わっており、日本の作家の招致を心より望んでいる一人だ。

(BooksActually)



シンガポール・マレーシア圏において「日本コンテンツ」はどう受け止められているのか。現地の大型店が撤退を余儀なくされる中、新店舗を出店するたびに支持されているのが紀伊國屋書店だ。

そこで日本語書籍の発注管理をする河合勇佑氏によると、「来店客のほとんどは現地の人。日本の紀伊國屋ブランドで選ばれているのは、側面的でしかない」という。これについては、愛着を持って「キノ」と呼ばれているクアラルンプール店の浅井英明支配人も同意見。では、なぜ受け入れられているのか。

河合氏によると、ポイントは「日本的な丁寧なオペレーション」だという。浅井氏も「開店時からスタッフの努力で受け継がれてきた日本式の店作り」と口を揃える。

また、両氏が共通して指摘するのは「売れるかどうかは、コンテンツの力が前提」という点だ。

「日本ブランド」に期待するのではなく、強いコンテンツを、オペレーションでしっかりとアピールしていくことが求められているという。

(紀伊國屋書店シンガポール本店)



次に、WAttention (和テンション) のシンガポールオフィスを訪問してお話を伺った。

<http://www.wattention.com/singapore/>

海外のほとんどの日系フリーペーパーが、海外在住の日本人向けに日本語で発行されているのに対し、WAttention は、シンガポールで唯一の「日本」の情報に特化した英字フリーマガジンだ。

日本の伝統文化からポップカルチャー、グルメ、テクノロジーなどに関心のある、30代をメインとした、購買力があり好奇心旺盛なシンガポール人に読まれているようだ。現在の発行部数は4万部。

実はこのWAttention、シンガポール以外に、東京、台湾、マレーシア、ロサンゼルス、タイでも配布されており、英語版に加えてタイ語版、中国語(繁体字)版も着実に読者を増やしているらしい。シンガポールでビジネスを展開している日系企業を中心に、広告も順調に伸びているようだ。そして、タイ語版は現在なんと10万部も発行されているとのこと。

「日本に関する情報は世界でも人気が高い。例えばグーグルで『Ramen (ラーメン)』と検索すれば、英語でも数多く紹介されてはいるが、それらの情報は断片的でまとまりがない。先日、ラーメンについての体系だった情報をきちんと英語でまとめてWAttentionで特集したところ、大変な反響があった」と、クリエイティブディレクターの二藤部氏は言う。

しかしながら、日本のコンテンツであれば何でもいいというわけではないようだ。例えば、マレーシアは基本的にイスラム圏なので豚肉はご法度。それ以外にも細かい点で配慮しなければならないことはたくさんあるという。日本に居るとそういった事情がなかなか肌感覚としてわからない。日本のコンテンツを世界に広めるには、現地の事情に通じている方々の力を借りるのが一番の近道だと感じた。



(WAttention シンガポールの十河氏
[左] と二藤部氏)

●シンガポールやアジアの作家の抱える課題

マレーシアのクアラルンプールに Silverfish Books という出版社がある。オーナーのラーマン氏は元エンジニアで、アジアの才能を世界に広めようと出版の世界に入ったという異色の経歴を持つ。氏は、「実はシンガポール人作家といえども、英語での表現力は世界標準に比べるとまだまだ未熟。自分はマレーシアやインドネシア、ベトナム、ミャンマー、タイから良いストーリーテラーや才能を見出し、翻訳・編集し、アジアの文学を世界標準に持っていきたい」と熱く語る。

シンガポールは英語が公用語ではあるけれども、いざ文学の話となると、ラーマン氏の言葉を借りるなら「発展途上」ということになる。これは初めて聞く貴重な意見だった。また、ASEAN6 億人の市場からは今後必ず優れた才能が現れると確信している氏は、翻訳家の不足と助成金の重要性を訴えていた。



(Silverfish Books ラーマン氏)

●結論

シンガポールは英語や中国語、マレー語やタミル語が通用し、実に国際色豊かな都市国家であった。英語で世界発信できる強みはあるけれども、国際的にはまだ認知度が低いという現状に対するもどかしさも垣間見えた。一方、日本の文学やコンテンツは国際社会で一定の評価とブランド力を得てはいるが、ほとんどの作品は英語で発表されることなく、国内市場だけで終わるか、親日的なアジアの国でいくつかのローカル言語に翻訳されて終わってしまうケースが圧倒的多数だ。

今回シンガポールとクアラルンプールの出版関係者や作家を取材して感じたのは、今後、日本の作家は積極的にアジアの作家と交流し、例えばコラボレーション企画等でアジアから英語で発信する流れを作ってはどうかということだ。今回の文学祭のように、現地作家との交流や新たな文学賞の創設を通してアジア主導で文学を盛り上げていくことができれば、と思う。その際、今後も経済成長が大いに見込まれ、アジア圏のハブとなっているシンガポールでこのようなイベントを行う意義は大きいだろう。そして、英語で作品を出していくことが商業的な成功を見込む上で鍵になるのは間違いない。

小社では今後、ワールドワイドでネット上での英訳オーディションを開催する構想を練っている。将来的には世界のあらゆる言語を英訳するオーディションも開催できたらいい。世界がデジタル化し、フラット化する流れを上手く活用して、文学や出版の国境を越えた活動を後押しするイノベーションを起こしたいと思っている。一方で、現地の紀伊國屋書店や地元書店を通じてリアルの交流を増やしていくことも大切だ。

6億もの人口を抱える新興マーケットであるASEANの中心に位置するシンガポール。ITインフラが日本以上に進み、英語が通じ、親日的なその国柄は、今後のアジア戦略、ひいては世界戦略において間違いなく重要な拠点となるだろう。

株式会社トランネット 近谷浩二

(*紀伊國屋書店シンガポール店、クアラルンプール店の記事については公認会計士・碓信一郎氏が担当しました)

Copyright(c) 2013 TranNet KK all rights reserved



〒106-0046 東京都港区元麻布3-1-35 c-MA3 A棟 4階

<http://www.trannet.co.jp>

株式会社トランネット